寺子屋講演会

〈 シリーズ「*江戸を覗く*」Ⅷ 〉

「酉（とり）の祭（まち）について」

平成 20 年 10 月 24 日　於：青梅 喜楽屋

■「酉の市」ではなくて「酉の祭」？

本日のタイトル「酉の祭について」を見たときに、「えっ？“酉の市”ではなくて“酉の祭”？」、また、「“まつり”ではなくて“まち”？」と思われた方もいるかも知れません。でも、これは間違いではないのです。

実は江戸時代には、現在の「酉の市」のことを「とりのまち」と呼ぶことが多くあったのです。

神田の名主であった齋藤月岑が、江戸の年中行事について記した天保 9（1838）年刊の『東都歳事記』の「十一月」の項には、次のように書かれています。

> **酉（とり）の日　　酉の祭（まち）。酉のまちは酉のまつりの縮語なり。酉の町と書けるは拠なし。また酉の市ともいふ。**

つまり、「酉の祭」ともいい、「酉の市」ともいったということ、また、「まち」には「祭」と「町」という字をあてることがあったということがわかります。

そのほか、喜多川守貞の『守貞謾稿』（天保 8（1837）年起稿）では「酉の町」、歌川廣重の絵では「酉の町・酉の丁・酉のまち」など、色々とあります。未見ですが、「酉の待」とする例もあるそうです。

いずれにせよ、「酉の祭」や「酉の町」などはすべて、11 月の酉の日に行われる「酉の市」のことを指した同じ意味の言葉なのです。

ただし、ここでいう「まち」は、一般的にイメージする「町」ではなくて、「門前町の縁日」といった意味合いです。

ちなみに、「祭」を「まち」と読むのと同様に、「市」を「まち」と読ませることもあります。これは、そもそも「町」は「市」から発展したもので、さらに、「市」は、その地域の神社や寺院の「祭日・縁日」から発生しているのが普通であるところから、文字とその読みの上でも混合がされてきたのであろうと思われます。

神社の祭日・寺院の縁日
↓
集まってくる人たちを相手にした市が開かれるようになる
↓
市が毎月決まった日に定期的に開かれるようになる
↓
定例市が常設的になり、店舗が出現し、町になる

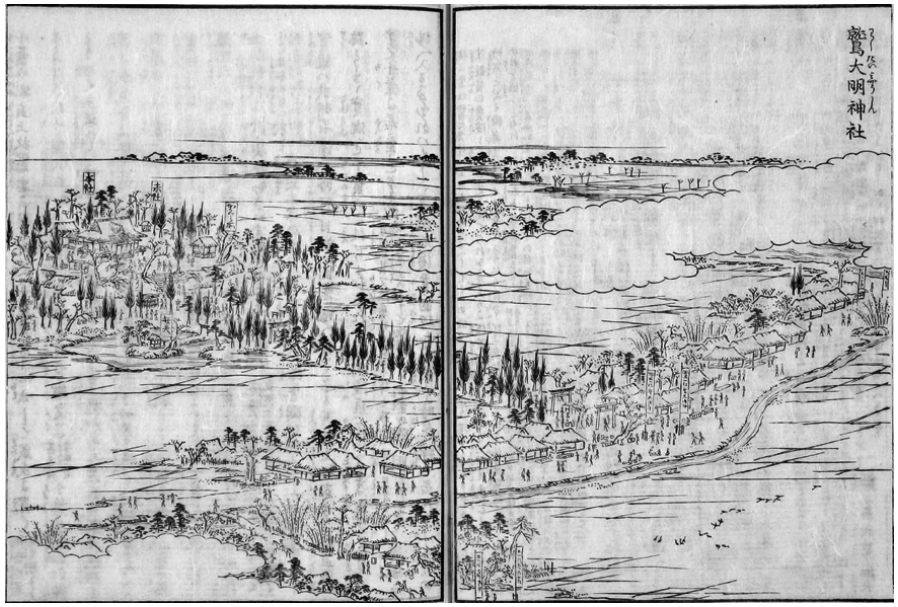
■酉の市の始まりは、江戸の田舎の小さな神社！

ここからは、現代風に「酉の市」としていきましょう。

酉の市の風習が始まったのは、江戸時代に入ってから、それも、関西生まれではなく、江戸で始まったようです。

江戸の酉の市の元祖は、江戸から北へ三里、葛西花又村の「鷲大明神（わしだいみょうじん／おおとりだいみょうじん）」、現在の足立区花畑の「大鷲神社（おおとりじんじゃ）」です。江戸時代で考えると、鷲大明神のあった葛西村、すなわち、武蔵国南葛西郡というのはかなりの田舎で、鷲大明神は、農村の中の小さな神社でした。

もともとは、大坂は和泉国の一の宮「大鳥神社」（大阪府堺市鳳北町）の分霊を祀ったものだといわれていますが、そのあたりも定かではありません。小さな神社ですので、当時の詳しい神史なども残されてはいなかったようで、設立年も不明です。



この神社の由来は、亡くなったときに、大きな白い鳥になって遠くへ飛んでいったとの伝説が残る日本武尊（やまとたけるのみこと）が、「東征の戦の勝利を花畑の大鷲神社の地で祝った。それが 11 月の酉の日であった」ので、その日を祭日とした、といったものです。

江戸の頃、葛西のこのあたりはどうやら、養鶏を行い、江戸に鶏卵を供給する地域だったようです。そうしたことから、鶏にちなんで、鷲大明神を勧請し、社を建てたのではないかと思われます。酉の日に行われる鳥の神社のお祭りなので、「酉の祭」、「お酉様」というわけです。

なお、この鷲大明神のことを、「鶏大明神」と表記した例もあります。葛西のこのあたりが鶏と密接に結びついた地域であったことの証かと思います。

ところで、鷲大明神の本家本元である大坂の大鳥神社には、酉の日に市が立って、そこで縁起物が売られるなどといった風習は、全くありません。つまり、酉の市という行事は、完全に江戸生まれの風習なのです。

江戸の酉の市に関する最も古い記録といわれているのは、享保 20（1735）年の『続江戸砂子』の記述です。

葛西花又村鶏大明神の祭、市立。三ツ有レハ三日共ニ市立

この『続江戸砂子』以前に酉の市に関する文献はなく、また、他の神社のことについても全く触れられていないようです。

■なぜ、田舎の小社の祭りが有名に？

葛西花又村の鷲大明神は、畑の中にぽつんとあるような、小さなお宮でした。その小さな神社の祭日がなぜ、江戸中に知られる酉の市という大きな行事へと発展したのでしょうか？

葛西花又村でははじめ、鷲大明神の祭日には、生きた鶏を神社に奉納する形で、祭事を行っていたようです。境内には鶏小屋が作られ、そこに収められた鶏はその後、浅草の浅草寺の境内に放されたといいます。

当時の 11 月（旧暦）といえば、今でいえば 12 月の寒い時期です。農村である葛西花又村では、その年の収穫を終えて閑農期に入り、また、翌年への備えの時期でもあります。そうした時期の祭事でしたので、鷲大明神の祭日には、そのうちに自然と、農機具などの売り買いをする市が立つようになったようです。

しかし、それだけのことでは、大して有名にはなりません。実は、葛西花又村の鷲大明神の酉の市が有名になった要因は、「賭博」にありました。

鷲大明神の祭日は、江戸から離れた田舎ということもあり、どうやら、暗黙のうちにその日だけは賭博が認められていたようなのです。

この頃の賭博は、いわゆる「辻賭博」です。神社の参道とか神社へ至る道筋とかで博打をするのです。このオープン賭博の人気から、葛西花又村の鷲大明神の酉の市は、次第に有名になっていったようです。

ところが、あまりにも有名になり、その規模が大きくなってしまったため、風紀上、幕府も黙って見過ごすことができなくなってし

まいました。安永 2（1773）年（一説には安永 5 年とも）に正式に、幕府から賭博禁止令が言い渡されます。これに伴い、葛西花又村の鷲大明神の酉の市に参詣する人は、次第に減ってしまったとのことです。

さて、葛西花又村の鷲大明神が廃っていくのと入れ替わるように有名になったのは、いまでもナンバーワンの酉の市として知られる「浅草の酉の市」です。

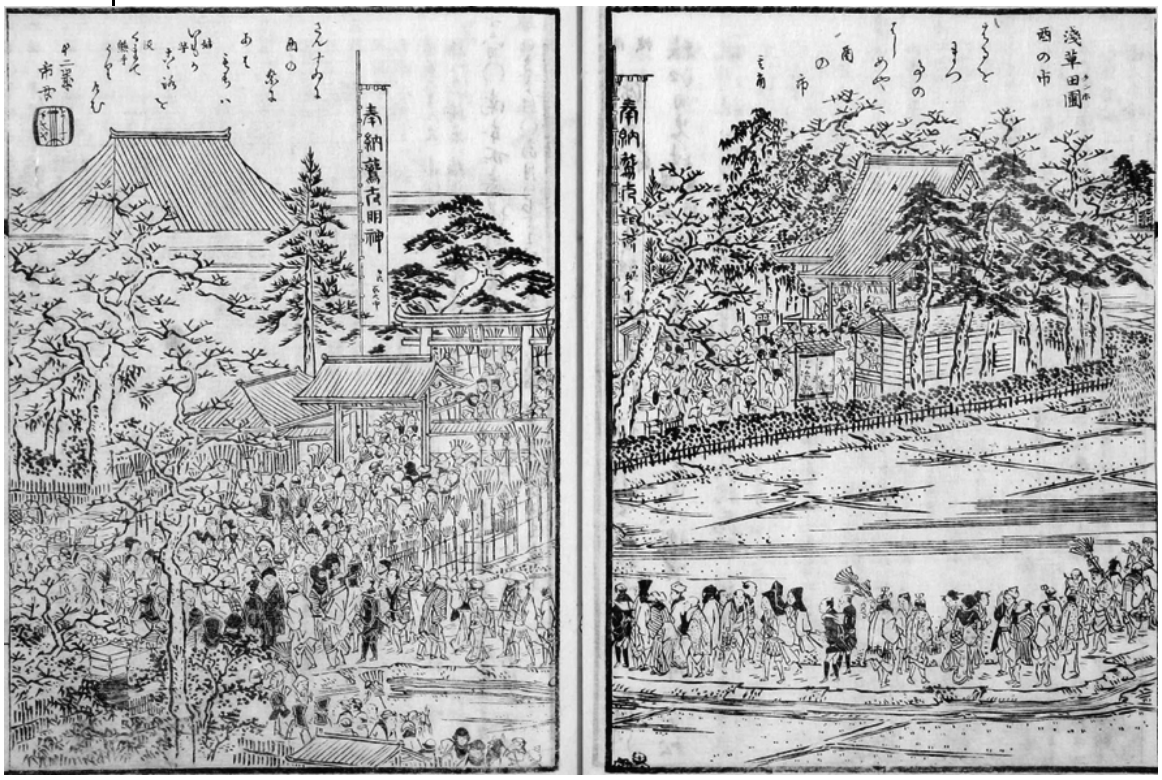
■「打つ」だけから「飲む・打つ・買う」へ！

「浅草の酉の市」が行われるのは、浅草のはずれに位置する「鷲（おおとり）神社」（台東区千束）です。こちらも、当時は浅草のはずれの田圃の中にあったので、「下谷のお酉様」「浅草田圃の酉の市」などと呼ばれていました。

浅草の鷲神社は、そもそもは葛西花又村の鷲大明神から分祀された神社で、浅草の長国寺の管轄になります。両社はそうした関係ですので、葛西花又村の鷲大明神の酉の市を「本酉」、浅草鷲神社の酉の市のことを「新酉」と呼んだりもします。ただし、浅草鷲神社が分祀された時期は、享保の頃とも天明の頃ともいわれ、定かではありません。一説には、葛西花又村が少々寂れてきたので、江戸の中心部に近い浅草に新しいスポットを作ったとの話もあります。

浅草鷲神社の酉の市のことが文献に最初に登場するのは、享和 3（1803）年の『増補江戸年中行事』のようです。

十一月酉の日、かさい花又村、大とり明神祭礼、運の神なり。参詣多し。小さき熊手を売る。とうのいものかしら、名物なり。浅草たんぼにも同社あり。酉の日は上中下ともに祭礼なり

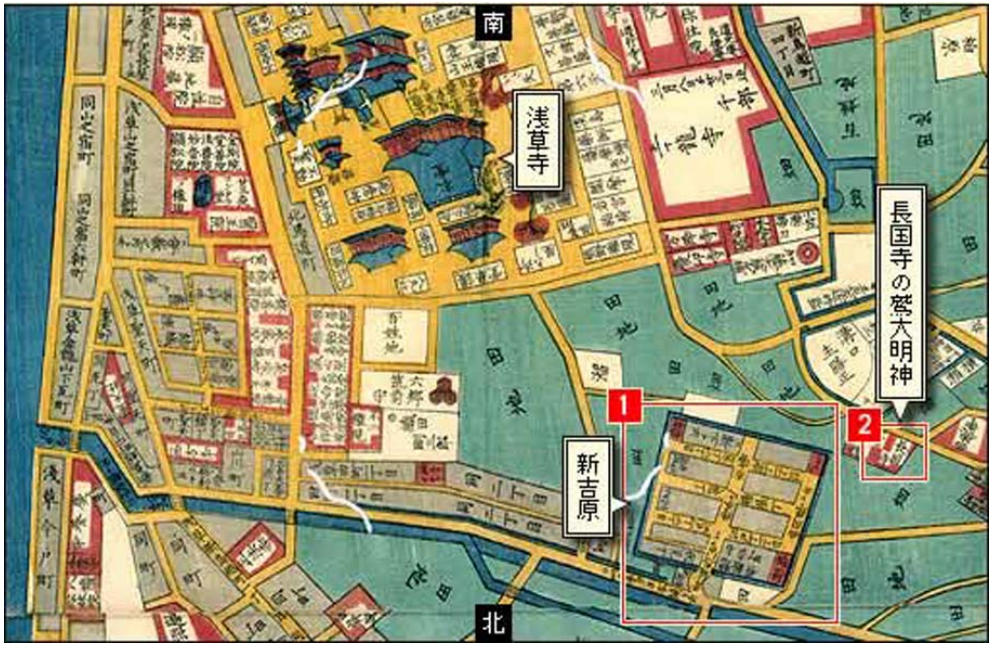


また、前述の『東都歳事記』には、次のように書かれています。

下谷田圃鷲大明神社、別当長国寺、世俗しん鳥といふ。今日開帳あり。近来参詣群集する事夥し。当社の賑へる事は、今天保壬辰よりおよそ五十余年以前よりの事とぞ。粟餅・いもがしらを商ふ事、葛西に同じ。熊手はわきて大なるを商ふ。中古は青竹の茶筅を鬻（ひさ）ぎしといふ。

浅草鷲神社の酉の市でも、賭博はそこそこ行われていたようですが、それ以上にこの酉の市の賑わいに貢献したのは、すぐ近くにある幕府公認の遊郭「吉原」の存在でした。

吉原は、四方を堀で巡らし、通常は大門（おおもん）というところからしか出入りができなかったものを、酉の市の立つ日には、特別の日にだけ堀にかける橋もすべてオープン状態にし、一般の人たちの出入りも自由としました。



浅草鷲神社の酉の市は、江戸の庶民文化が全盛を迎える 1800 年過ぎ頃にはもう、大変な人出の一大イベントに発展していたのです。「博打を“打つ”」で人気を博した葛西花又村の鷲大明神の酉の市が、“打つ”の要素は若干少なくなったものの、「吉原で“飲む”と“買う”」ができるようになって、さらに人気が高まったのでした。

余談ですが、「三の酉まである年には、火事が多い」「三の酉まである年には、吉原に変事が起こる」などということも言われるようになりました。火事の多い都市であった江戸ですので、その備え・戒めのための標語であることはもちろんですが、家で待っている女房が、酉の市に行き、その浮かれ気分の勢いで、吉原で女にでれでれし、散財をしてくる男に対して、牽制をする意味もあるといった説もあります。

さらに余談ですが、「酉の市（酉の祭）の売れ残り」という言葉があります。これは、「誰も気にかけてくれないような器量の悪い女性」のことを指します。「酉の市で売れ残った熊手はもう売るチャンスがない」ということと、吉原で、おそらく客で満杯になったであろう「酉の市の日にさえお客が付かないような女」ということを合わせた洒落から来ているのではないかと思われます。

いずれにせよ、酉の市は、江戸の人たちの数少ない娯楽の日だったのです。

■酉の市の人気縁起物、ナンバーワンは「縁起熊手」！

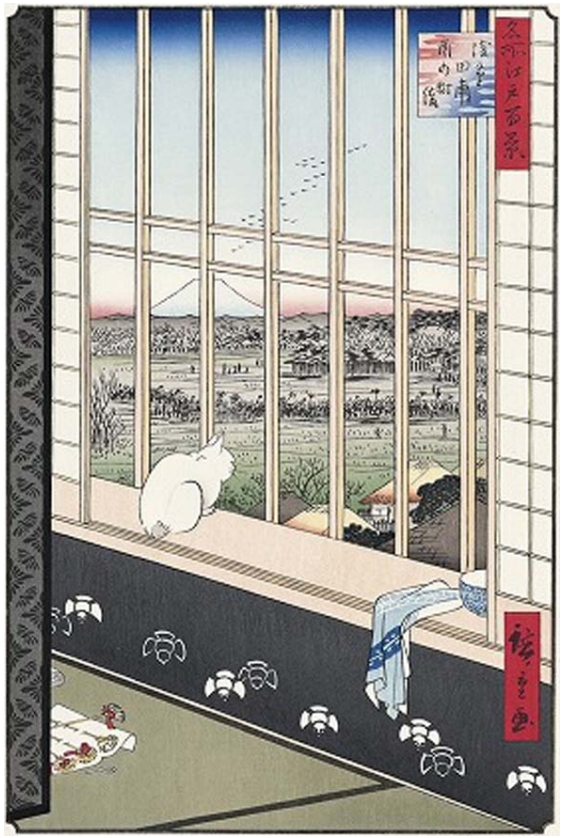
1800 年代初頭の様子がいろいろと書かれた『遊歴雑記』という本には、葛西花又村の鷲大明神の酉の市で売られているものについて、次のように書かれています。

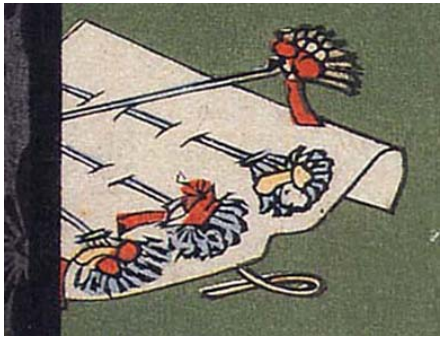
……商人は小路の左右に尺地もなく居ながれ、笊（ざる）を商ふもの、川魚、海魚、塩物屋のよろづ鉄もの類、さては唐の芋何首烏（とうのいも・かしゅう）、柚、蜜柑、柿、琉球芋、金柑、黍（きび）もろこしの切餅、小間物、古着類、竹熊手にいたるまで、種々の商人の出たるは更に市のごとし……
……熊手の笄（こうがい）・簪（かんざし）をひさぐもの夥（おびただ）しく、これを首に刺ば運つよく、一切の魔事を祓い、よろづ勝利を得とて、人みな求て土産（みやげ）とし、あるいは、竹の大熊手、竹箒（たけぼうき）を求るあり。また、何首烏の芋、八頭（やつがしら）といへる芋を調え、さては抽笊（ぬきざる）の類ひ、何れも魔除によく……

江戸の酉の市では、「熊手・粟餅・芋頭」の３つがお定まりの買い物となっていたようです。中でも、熊手は、「酉の市といえば熊手」というほどのお決まりになってきて、現代に引き継がれています。

初期の酉の市では、飾り付けのされた熊手ではなく、実用品の熊手が売られていたようで、それに、商売っ気のある人がおかめの面や宝船などを付けて売ったのが次第に人気を博し、商人を中心に、“厄を払い、金銭をかきこむ縁起物”としての「縁起熊手・飾り熊手」が名物になっていったようです。

また、『遊歴雑記』の中に「熊手の笄・簪」というものが出てきますが、これは、ミニチュアの縁起熊手で、吉原の遊女や芸者へプレゼントしたことあたりから人気が出てきたようです。





なお、縁起熊手を買うときには、売り手と買い手との間で値切りのやり取りをするのが一つの楽しみになっていました。売り手が高い値をいってくるのを、買い手が値切る……。その繰り返しを楽しむのです。そして最後には、かなり値引きをしてもらって、シャンシャンシャンと手締め。それでも売り手は儲かるのですが、このとき買い手は、楽しませてもらったお礼といった意味で、売り手に対し、熊手の代金とは別にご祝儀を手渡すのです。

こうした粋な風習は、昭和 40 年代ぐらいまでの酉の市やだるま市では見られたのですが、いまではほとんど見られなくなってしまいました。

■酉の市は、明治以降に大発展！

江戸で生まれ、庶民の中で発展してきた酉の市という風習ですが、明治以降になると、さらに大規模化し、人出も多くなり、大発展をしていきます。東京近郊の各所でも、酉の市を行う神社が多くなり、初冬が感じられる風習として完全に定着していきました。

その後、大正の関東大震災で東京は壊滅状態になるのですが、その復興後にはさらに大発展。

また、昭和の戦後も発展は継続しました。明治時代の後半以降、その賑わいは、大変なものになっていったようです。

市から発展した町である青梅でも、毎年、酉の市が行われています。はじめは仲町の方で行われていたといった話もありますが、現在は、11 月の酉の日に住吉神社の境内で行われています。

今年の 11 月は「一の酉」から「三の酉」まであるのですが、今年の住吉神社内の「大鳥神社」の酉の市は、『5 日(水)』の一の酉と『17 日(月)』の二の酉に行われます。長い階段を頑張って上っていけば、甘酒の振る舞いがあります。

また、昨年から、祭礼を引き立てる風物である「地口行灯（じぐちあんどん)」が飾られるようになりました。そもそも、文化性の高い町で、祭りも盛んな青梅の酉の市にふさわしい、粋で心和む飾り付けです。

今年の 11 月の酉の日には、ぜひ、青梅の酉の市に足を運んで、その風情をお楽しみください。